

21世紀水倶楽部だより

発行：特定非営利活動法人 21世紀水倶楽部
発行者：亀田 泰武
編集：特定非営利活動法人 21世紀水倶楽部 広報担当
〒171-0011 東京都豊島区目白 2-1-1
URL <http://www.21water.jp/>
E-mail info1@21water.jp

第 27 号 2013 年 4 月 25 日号

♪窓の下には神田川

理事 栗原秀人

この4月、勤務する会社の本社が神田須田町に引っ越しました。「須田町ってどこ？」という方には、明治45年、東京駅に先駆けて鉄道院甲武鉄道（現中央線）のターミナル駅として創業した「万世橋駅（写真）」の跡地、さらには平成18年まで多くの少年

達に親しまれ、もしかしたら皆様も訪れたことがあるあの「交通博物館」の跡地といった方が分りや



すいと思います。本社の窓の下には、三面張りの神田川が流れています。神田川と聞くと、「♪貴方はもう忘れたかしら、赤い手

拭いマフラーにして…」、昭和48年に大ヒットした南こうせつ「神田川」を思い浮かべる方も多いと思います。



「三面張り水路は、景観に全く配慮しない無骨なだけの構造物だ。当時の土木屋の見識を疑う。」と批判する某新聞系評論家がいまいましたが、時代と地域のニーズを見極めた上で、「三面張りの功罪」を総合的に評価する見識が欲しいと思います。先ず「三面張り」だったからこそ、狭隘な地域での浸水対策がここまで適っているのです。一方で、三面張りでおそらく水もかなり汚かっただろう神田川だったから、昭和40年代の名歌の舞台として相応しかったのだと思っています。大きな夢を抱きながら田舎から東京に出て必死に生きた若者、何もつかめないままに自分を見失いかけて同じ悩みを持つ異性と同居するが、どこかにせつなさや不安が漂

っているそんな時代、「若かったあの頃、♪ただ貴方のやさしさが怖かった。」、最後の歌詞が焼きついています。

眼下の神田川、下水道整備のお陰で普段は透き通るまでに綺麗な水が流れ、少し前までは上流から流れてくるサクラの花びらが川面を覆い飾っていました。雨の後の神田川は残念なことにチョットといただけません。上流には数十箇所といわれる合流式下水道の吐き口があって、雨の降り方によってはかなりの下水が越流し、万世橋を歩くと独特の悪臭が漂ってきます。この「合流式下水道」についても、時代と地域のニーズを踏まえた「功罪」両面からの評価と今日的視点に立ったさらなる再構築が必要だと思えます。

神田といえば、「神田下水」ですが、ここから10分ほど歩いた神田駅界隈で今も現役として活躍しています。交通博物館は、明治44年当時の鉄道院総裁だった後藤新平の提案がキッカケだったと知りますが、後藤新平といえば下水道を始め近代日本の都市計画を牽引した方です。つくづく下水道に関係のある土地に引っ越してきたものだと思ってしまう。

2012年度活動報告

連続研究集会第二弾「取付管の今日的課題」報告

理事 阿部恭二

1月30日の研究集会「排水設備の今日的課題」に引き続き、3月27日、研究集会「取付管の今日的課題」が（財）下水道新技術推進機構において開催された。参加者は公共団体、大学、コンサルタント、製品メーカー、管路管理者、関連団体など60名。

最初の講演は、国土技術政策総合研究所（国総研）下水道研究部下水道研究室主任研究官の深谷渉氏の「取付管の視点から見た道路陥没の現状」。深谷講師は、毎年4,000件前後発生している道路陥没の実態を紹介し、陶管の取付管が陥没原因の約6割を占めている現状を踏まえ、その原因を分析し、陥没の予兆を発見するための技術や課題などを報告した。



次に、鳥取県環境下水道部下水道企画課課長補佐の田村温氏が、鳥取市が平成 24 年度から導入している処理場と管路一体の包括的民間委託の経緯や考え方、それに基づく取付管等管理の状況などを、「包括的業務委託に関する鳥取市の取り組み」と題して講演した。

続いて千葉県建設局下水道建設部下水道計画課課長補佐の鎗田篤治氏が「千葉県における取付管等管理の現状と課題」をテーマに講演。鎗田講師は、東日本大震災の液状化被害状況や震災復旧の経緯などを示し、それを踏まえて排水設備と取付管も適正に維持管理していかなければならないことを訴えた。

最後に、管清工業(株)生産技術部公共事業担当主任の佐藤秀樹氏が「取付管に関わる管理と更新」を演題に講演した。この講演では、取付管の巡視・点検、調査、改築・修繕など、佐藤講師が日常業務を通して得た、より現場に即した具体的な考え方や手法、技術、手順などが示された。

この後、4名の講師と参加者を交え、当倶楽部理事の山崎義広理事をコーディネーターとして全体討議を行ったが、1月30日の研究集会を含め、連続研究集会「排水設備と取付管の今日的課題」を総括すると、排水設備と取付管については、ハード的にもソフト的にも課題が山積していること、それらの課題解決に向けて今後、下水道サイドに積極的な取り組みが求められることなどが浮き彫りになった研究集会だったと言える。

会員だより

ロサンゼルス見聞録その15 住宅内のプール

内田信一郎

ロサンゼルス地域は従来水資源不足地域であるため、下水の凝集沈殿・砂ろ過法による3次処理水の直接的再利用やRO膜ろ過

法等による高度処理水の間接的飲料水化等が最も進んでいる地域である。高級住宅内にはプールがある事は理解出来るが庶民的なアパートにもプールがあることが多く、場合によっては温水プールもある。アパートといっても日本の高層住宅ではなく、殆ど平屋建か2階建てまでの住宅の集合体で、周囲は門柵塀で囲まれていて一応セキュリティは確保されている。質の差があるがゲートコミュニティである。

故にこの種のゲートコミュニティ又はアパートの中のプールはそこに住んでいる住民のアメニティ施設で、これらの維持管理費は家賃に含まれている。娘家族が住んでいる庶民的なアパートにもプールがあったので、夏には孫と一緒に良くプールで過ごした。



ロサンゼルス地域は地中海式気候で夏は25～30度程度と涼しく、冬は暖かいので、日本の多湿で高温の夏に慣れているものにはプールの水はとても冷たい。こちらの住民を見ているとプールで泳ぐのは子供が多く、大人はビーチベッドで日光浴や読書を楽しみながら身体を焼いている。自分の孫の友人も遊びに来て



一緒に泳いでいたが、プールと自宅が直ぐのことが多いのでそのまま自宅に戻って風呂場でシャワーを浴びて着替えるスタイルである。泳いだり

日光浴で疲れた後はプールの傍にある備え付けの立派なバーベキューセットで持ち込んだビールや肉で焼肉パーティーを楽しむのが生活の一部になっている。

プールの管理を見ていると乾燥地域であるので蒸発量が多いためか1週間に1回程度水道水を補給していた。また、プールの水は常に循環ろ過して消毒をしているようであった。周辺の樹木からの落ち葉がプールの水面に落ちた場合、泳いでいる人や管理人が網ですくって除去していた。

問題なのは水資源が不足していて下水の高度処理水を間接的飲料水化しないと都市活動や都市生活が維持できない半乾燥・砂漠地域であるのにプールが生活の一部になっている事である。今後益々地球温暖化の影響を受けてこの地域でも降雨量が減少していく。その対策として西海岸地域であるので海水の淡水化事業がどんどん進められているのは、プールのある生活は絶対必需的ステイタスとなっているからなのだろう。日本の膜製造メーカーには朗報である。

編集幹事のあと整理

- 巻頭文は栗原理事の「窓の下には神田川」。この唄の歌詞に関連して栗原さんの勤務先の地元をうまく紹介しています。歌手の南こうせつさんは近頃、懐かしのメロディでよく出演しますが、編集幹事と同じ団塊世代で、栗原さんもその最後の歳にあたるのでしょうか？
- 3月27日開催の研究集会「取付管の今日的課題」の報告文を阿部理事からいただき掲載しました。二回連続研究集会の二回目です。二回の総括で、排水設備も取付管もハードソフトともに課題が山積しているとのこと、解決が待たれます。
- 会員だよりの連載もの、内田会員のロサンゼルスシリーズは15回目で、「住宅内プール」。ロスアンゼルス暑いがからった気候でのプールのある庭。この住宅はアメリカンドリーム（今は死語？）でしたね。

- 齋藤会員と林会員の連載は今回お休みです。内田会員の連載ががんばっていますが、少し寂しい状態です。
- ですので、会員だよりコーナーへの投稿を熱望します。投稿時期はいつでも。直近の号に掲載します。投稿要領などは望月から毎回お出ししている原稿依頼メールをご覧ください。



↑ (埋め草写真です) ドイツ最南端のアイブ湖 (標高約 1,000m)。雲間にはドイツ最高峰のツークシュピツェ山 (標高 2,962m)。湖畔から山頂近くまで一本のロープウェイで登ることができる (写真の中央やや左に鉄塔が見える)。高度差約 2,000m を稼ぐのは圧巻だ。下ったときは飛行機の着陸と同じに耳が痛くなった。

編集幹事・望月